

国際ワークショップ：日本語と世界の言語における体言化と連体修飾

主催：国立国語研究所共同研究プロジェクト「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」

共催：ダナン大学日本語学部

2023年1月3日（火）

8:00 to 8:15: 開催の挨拶：Dr. Huynh Ngoc Mai Kha, Vice president, UFLS-UD

8:15 to 8:30: 国際ワークショップの趣旨：Prashant PARDESHI 教授（国立国語研究所）

8:30 to 10:00: 講演 1:

「準体法とは何か？—体言化と連体修飾—」柴谷方良（神戸大学名誉教授・（米）ライス大学名誉教授）

10:00 to 10:30: 休憩

10:30 to 11:30: 講演 2:

「ベトナム語の類別詞—体言化における役割」清水政明（大阪大学）

11:30 to 12:00: Talk 3

「南アジア諸語（インド・アーリヤ諸語・ドラヴィダ諸語）における類別詞および性表示：体言化理論の観点からの再吟味」Prashant PARDESHI（プラシャント・パルデシ）  
国立国語研究所教授

12:00 to 12:30: ディスカッションおよび開催の挨拶：Dr. Huynh Ngoc Mai Kha, Vice president, UFLS-UD

## 発表要旨

### 講演 1

#### 準体法とは何か？

#### —体言化と連体修飾—

柴谷方良

神戸大学名誉教授・(米)ライス大学名誉教授

本講義では、文法的体言化(grammatical nominalization)によって派生される構造、「準体言」(山田孝雄)の本質とその用法について論じる。対象とされる構造は、数量詞(numeral classifiers)、指示詞(demonstratives)、属格(genitives)、形容詞(adjectives)、連体節/関係節(participles/relative clauses)などである。これらは、日本語文法論では通常「連体詞」(西洋文法では adnominal)として纏められるが、洋の東西を問わず、なぜこれら別品詞に属するものが一様に連体修飾の機能を果たすのかという疑問に答えていない。これらが連体詞として機能するのは、体言化作用によるとするのが本論の主張である。例えば、日本語を含め多くの言語で数詞「3」が名詞を修飾するには、「3人」、「3本」などと類別詞の付加が要求されるが、このような類別詞は数詞を体言化する(数詞から新しいノミナルを派生する)とともに、その指示物を分類する役割を果たしていて、本来的には「今大会では、ベトナムからは**3人**が入賞した」、「買って来た鉛筆は、**3本**を削って、残りは机の中にしまった」というように、名詞句の主部として機能する体言類に準じる構造(準体言)である。「**3人**のベトナム人」・「**3本**の鉛筆」などは、その修飾用法であるに過ぎない。このような、連体詞と呼ばれるさまざまな要素の体言化分析の正当化を進める上で、歴史的な観点や、方言、他・多言語との比較・対照研究がいかに重要な役割を果たすかについても論じる。

### 講演 2

#### ベトナム語の類別詞—体言化における役割

清水政明

大阪大学

本研究は、まずベトナム語の類別詞に関する先行研究 (Emeneau 1951, Nguyen T.C. 1975, Cao X.H. 1992, Nguyen T. 2008, Vu D.N. 2020 等) を整理した上で、従来の名詞句におけるステータスに関する見解を確認する。Tuong Nguyen (2008) はベトナム語の類別詞を event-classifiers (例: cái đẹp [CLF+beautiful] ‘beauty’), unit-classifiers (例: một bài thơ [one+CLF+poetry] ‘a poem’), kind-classifiers (例: một thứ quần áo [one+CLF+pants+shirt] ‘a sort of clothes’) の3種に分類し、その中の event-classifiers のみが体言化に使用されることを指摘した。本発表では、体言化において類別詞が果たす役割を再考した上で、類別詞が連体詞 (数量詞、指示詞、属格、形容詞、関係節) のいずれを体言化できるかを検証する。柴谷 (2021) による体言化の類型論的研究に照らして再考することが、ベトナム語の類別詞研究にいかに関与するかを考えてみたい。

### 講演 3

南アジア諸語 (インド・アーリヤ諸語・ドラヴィダ諸語) における類別詞および性表示  
— 体言化理論の観点からの再吟味 —

Prashant PARDESHI (プラシャント・パルデシ)

国立国語研究所

南アジア諸語に関するの先行研究において類別詞および性表示はお互いに無関係の別個の現象として扱われている。一方、柴谷 (2021) は類別詞と性標示はともに数詞、指示詞、属格などから新しい体言的構造を派生すると同時に、その指示物を分類する役割を果たす文法的体言化 (grammatical nominalization) の一種であると主張している。

本発表では南アジア諸語の一次的なデータを体言化理論の観点から再吟味し、これら言語における類別詞・性標示が上述の修飾要素といかに形態的・機能的に関連しているのかを明らかにする。さらに、柴谷(2021)で提案された階層

(NUM>DEM>GEN>ADJ >V-based (participle)) および当該構造の NP use (名詞句用法、「3個」) と Mod use (修飾用法、「3個の卵」) の二用法の区別が通言語的対照研究においていかに有効な枠組みを提供するかを検証する。